

中国語インテンシブプログラムポリシーの構築(2)

秦 耕 司

7 . 教育方針

教育方針とは何か。それはプログラム教育の目標を実現するために設定する教育レベル、教育内容、教育方法、カリキュラム等、プログラム教育の全体構成を構築する際に根拠となるものである。教育方針をどう立てるか。その立て方によって教育効果は大きく変わってくる。随って、全体構成に大きく影響を与える教育方針を立てる前に、プログラムをとりまいている諸条件を明確にしておく必要がある。これらの条件を考慮せずに教育方針を立てれば、教育全体が焦点のズレたものとなって、教育効果が半減するからである。

条件には三つある。一つはプログラム教育を制約している枠組みと、プログラム教育を取り巻いている教育学習環境である。これを第一条件とする。二つ目は教育・学習上考慮すべき中国語の言語的特徴である。これを第二条件とする。第三条件はプログラム自体のカリキュラムではないが、プログラム教育と相乗効果および補完効果の関係がある語学留学の視点から、中国語の教育・学習の技能上の効果の面に焦点を当てた教学上から見た中国語の特徴である。プログラムにおける教育方針は、これら三つの条件を明確に認識すれば必然的に導き出されるであろう。プログラム教育の内容(カリキュラム、教育内容、教育方法、教育レベルなど)もそこから導き出されるものである。

先ず、第一条件の一つ枠組みを見よう。枠組みとは、プログラムの目標

と単位数，および教育の対象である。

目標は，中国語による高度な実践運用能力の習得である。「高度な」とは，あるテーマ、ある話題の下でコミュニケーションができることを言う。

単位数は24単位である。24単位といえば，第二外国語と専門学科の単位数の間である。設置科目にもある程度幅を持たせることができるので，目標を掲げて，これに見合った効果を求めるのに適当な単位数であろう。

対象は大学生である。大学生は英語を学び始める時の中学生に比し，教育のレベル、内容、方法、方針などの前提となる理解力、思考力、類推力、想像力、抽象思考、まとめる力、知識の範囲と量、発言力等にすぐれている。そこには教育内容、レベル、教育方法、進度など自ずと違いがある。

次にプログラムの教育・学習環境を見よう。

教育・学習環境とは，教室以外における言語環境のことである。これは日本で教育をする限り，日常中国語を使用する言語環境はない。たとえ身辺に中国人の友人や留学生がいたとしても，中国語の使用は，時間的にも場面的にも極めて限定されているので，教育上の背景にある条件として考慮することはできない。これはあくまで個々の学生による個別の問題である。

言語環境の揃っていない場所での教育・学習は，各技能の位置付けを正しく理解、認識し，それを踏まえた教育をしないと，最終的な目標を達成する上で効率が低くなる。そこで前に「5」で述べた各技能の位置付けを，ここで簡単に確認しておく。

基礎要件 発音

第一要件 読解力・文法知識 音読力

第二要件 作文力

第三要件 聴く力

会話力はこれらすべてを合わせた総合力である。

初修外国語にあつては，これらの技能は，初級から中級，中級から上級

へとすべて段階をおって上達するものである。随って先ず授業における最終段階での完成された姿を想定し、カリキュラムはすべての授業科目がそれに収斂されるように設定し、授業内容と授業方法を考えるべきであろう。

次に第二条件について述べる。中国語は母音優勢の言語で、母音が一定の長さを持ち、その母音に声調がかぶさっている。これが中国語の発音習得を極めて難しいものになっている。ここに何年中国語を学習しても、中国人が聴いても解らない発音で話す人が多い原因がある。加えて中国語は形態変化がなく一音節一形態素の言語である。どのような意味を持った単位（形態素、単語、句など）とどのような意味を持った単位が結合しているか、それと文脈が意味に関わっている。この2点が中国語の学習において、発音練習を殊の外必要としている要因となっている。発音練習は、単に正しい発音を習得することのみあるのではない。語感を磨き、読解力や作文力を向上させる手段でもあるのである。さらに中国語の文字は漢字という表意文字である。ピンインを習得し、そのピンインから脱却する教育をしなければ中国語を習得させたことにはならない。従来から中国語教育で最もネックになっているのがこれである。以上の特徴を踏まえると、中国語の実践力養成の教育は、連語と文構造の理解の上立った音読力の養成が最も重要なポイントとなる。

次に第三条件について述べる。語学留学では十分身に付かない技能がある。それは発音と作文力である。意外なようであるが事実である。これは多数の留学経験者の実態および聞き取り調査と、筆者が現地での授業を、初級から上級まで10大学を視察して得た結論である。

現地の授業では発音指導は丁寧にはなされない。とにかく発音は現地だから自然に習得できるものであるとの考えからか、どんどん進むことが優先されていて、学生の発音の修正は簡単に過ぎるほどである。だから留学を終えた後でも、簡単な会話や文はスラスラと読んでも、少し長くなったり難しくなると、途端に基本的な発音が乱れ、聴きづらくなるのはもちろん、通じない発音すら耳にすることも珍しくない。発音は、一度クセが付

くと、そのクセを取り除くのは不可能に近いほど難しい。発音の基礎は日本で十分にしておく必要がある。

作文は、典型的な間違いの修正や部分的な修正に終わるので、中国語らしい表現や文章全体の流れまでは指導されない。作文教育は、中国語の表現や中国語の文章の流れを習得させるのが主要な目的である。これは、内容的にもニュアンス的にも、自分が伝えたいことを正確に表現できる力を習得するのに非常に効果のある学習方法である。作文指導は言語環境のない日本での教育・学習の極めて重要な方法と言えるだろう。また中国語の文章を読んでいる時に、中国語の表現法の特徴をキャッチする感覚を身に付ける上でも非常に役に立つので、当然作文練習で身に付ける中国語らしい表現法感覚は、質的により高い会話力を身に付けるのにも関係する。作文教育は中国語習得に関わる教育上の重点項目である。

以上、発音・音読教育と作文指導は、後述の焦点の合ったネガ造り教育に最も重要な教育項目である。

最後に蛇足ながら一言付け加えておこう。それはプログラム教育は、学校教育であることである。学校教育は、基礎教育を旨とするものである。特定の場面に限定した中国語ではない。学校教育で養成しなければならないのは、どのような場面にも応用発展できる基礎力である。学校教育は、最も基本的で、規範的なものでなくてはならない。そうでなければ、見た目には派手で実践力はあるが、実際には基礎力とはならない、随って応用力のない場当たりの「語学力」を身に付ける教育になるであろう。その場かぎりの教育は、その場という限定された場面では優秀な「語学力」を発揮できても、実際には何ら益するところはない。昨今の成果主義の下で教育に携わる場合、語学教育関係者は特にこの点をきちんと見定めておく必要がある。

以上の諸条件を踏まえて、プログラムの方針を三種設定することにする。基本方針と実施方針と技能別教育方針である。この三つの教育方針は、いずれも当然のことながらプログラム教育の目標を実現するための方針であ

る。

基本方針とは、プログラム教育の全体を貫く方針で、カリキュラム、教育内容、教育方法を規定する最も基本となる方針である。実施方針とは、カリキュラムの構成および教育指導において、それぞれの技能をどの程度重点的に習得させるか、習得すべき各技能の比重を決める上で基となるプログラム教育の枠組みを設定する方針である。技能別教育方針とは、それぞれの技能の習得目標を達成するための教育方針である。

基本方針

基本方針を定めるには、先ず語学教育・学習の特質をきちんと理解、認識し、授業のできる範囲を明らかにしておかなければならない。

外国語の習得でいちばん難しいのは会話実践力である。会話力を習得するには、理解を旨とする読解はもちろん、生産力を養成する作文指導に比しても、音声を伴う上にごく短時間で反応を求められる分、数倍の時間とエネルギーを要する。その上、会話は具体的な場面がその背景にある。会話に用いられる語彙や表現はその場面に適した表現が少なくない。場面に即した表現の教育は、教室教育では限界がある。教育中国語における位置付けとしても、実践力養成における教育効果の面でも、あまり重視すべきものではない。学校教育ではなるべく汎用性の高いもの、つまり生産性の高いものを教材として用いて教育をした方が、基礎力養成としては確実である。場面に即した会話ではなく、あるテーマの下での話題性会話となればなおさらであろう。

以上2点を勘案すると、教室という環境的にも時間的にも制約のある教育現場で教育をするのは、語学的には汎用性の高い基本的なもの、内容的には可能な限り広い分野、多い分量のものを教材とした方が習得効率は高くなる。そして実践力は授業中に身に付けるのではなく、授業では確実に実践力へと転換できる高度で幅の広いしっかりした基礎的語学力を習得させるべきである。そこで基本方針を次のように定める。

基本方針：応用力へと発展する基礎力の養成

応用力とは、実践運用能力のことであり、基礎力とは、基礎学力と基礎技術力のことである。この基本方針は「焦点の合ったネガ造り」と言ってもよい。しっかりした発音で速読みができるようになった時、“黙写”で中国語の感覚がつかめるようになった時、“听写”である程度頻繁にひらめきが出るようになった時など、むしろ学生にとってはこちらの言いの方がピンとくると思われる。

実施方針

実施方針を立てるには、「5」で述べた各技能の位置づけを根拠とし、四つの技能を有機的に結び付け、相乗効果ができるようにすべきである。

読解力の養成

既述のように、最も短時間で、最も少ないエネルギーを用いて、最も高いレベルに到達できるのは読解力である。同じ時間量を用いて最も大量に中国語をインプットできるのも講読の授業である。その講読の授業は、単語の基本義とその意味範疇、単語の用法、文構造など、語学力の基盤となる能力を確実に身に付けるために必要な授業である。そればかりではない。実践力としての作文力、聴く力、話す力の素地となるものでもある。随って、カリキュラムは講読に最も比重を置くべきである。要は、講読で使用する教材と、講読でインプットした中国語を、実践力へと転化させる方法を考えればよいのである。

作文力の養成

中国語を理解する能力の次は、中国語を生産する能力である。中国語を生産する能力の養成には作文練習が最も効果的である。作文練習には注意すべき点が二つある。一つは文法的な面であり、一つは表現法や文の流れである。文法的な面とは正しい語順や機能語の正しい運用能力である。表現法や文の流れは、作文にしる、会話にしる、往々にして日本語をそのまま中国語に訳すが、これでは中国人に通じなかつたり、誤解を与えること

が少なくない。自分が生産する中国語から日本語的な感覚や発想を消し去る教育・学習、と言うより、最初から中国語の発想や文の流れの感覚を身に付けることのできる教育指導が求められる。中国語らしい表現の感覚を身に付けことができる教育として、作文指導は極めて重要である。作文教育は、読解力の次に位置付けすべき重要な科目であると言えよう。インテンシブプログラムの作文教育は、時間数のみならず、その教育指導方法に他には見られない特色がある。

音読力の養成

インプットした中国語と文字により生産した中国語を音声による実践会話で使えるようにするのは、発音と音読力による。随ってインテンシブ教育では、この音読力の養成を相当程度重視しなければならない。実践で使えるだけの音読力を身に付けるには、４年間を通しての不断の音読練習を必要とする。それほど中国語の発音は習得をするのが難しい言語である。だからこれは授業科目として配置するよりも、それぞれの科目において一定の位置付けをし、平常学習評価や定期試験に取り入れるなどして、学生自身が日頃不断に自学により練習するように指導するのが現実的であろう。これは、インテンシブ教育は実践力の習得を目的としているので、中国語を目にすれば反射的に「声が出てくる」習慣を身に付ける上でも効果的である。

聴く力の養成

聴く力を養成する授業には二つの目的がある。一つは耳を慣らすことであり、一つは語感を磨き、知らない単語や言い回しを聴いて解るようになる「ひらめき」感覚を磨くことである。前者はある程度練習をすれば慣れるので、授業は語学力の向上を図る上でも後者に焦点を当てるべきである。

聴く力を効率よく養成するには、インプットする中国語を少しでも多くすること。中国語を音声とともにインプットすることである。随って、読解力と音読力が聴く力養成の基礎となる。耳慣らしの練習は、他の授業科目の中に取り入れ、初級段階から始めるとよい。とは言え、ネイティブス

ピーカーの音声中国語を大量にインプットすることは講読や作文の授業ではできないので、授業では耳慣らしをしながら「ひらめき」感覚を磨くことを主眼とした授業をすべきである。そのためには一定量中国語をインプットしてからが効果的であろう。本格的な聴き取り用の授業は、中級段階から始めるのが適している。

技能別教育方針

発音と音読力およびピンイン

中国語の文字は表意文字である。これが中国語の教育・学習をして他の外国語に比し大きな困難をもたらしている原因である。それで中国語には日本語のルビに当たるピンインというローマ字が用いられているが、このピンインの習得とピンインからの脱却（後述）が求められる。アルファベット410通りの組み合わせからなるピンインの習得も難しいが、ピンインからの脱却となると更に難しい。辞書を引くにも、漢和辞典と同じように、画引きや部首引きから始めるので、親文字を調べるだけでも英和辞典の数倍の時間がかかる。多音節語となると更に時間を要するのである。それで一般クラスでは例外なく、専門課程の上級クラスですらピンイン付の教科書を用いているところがある。しかしそれでは中国語を習得したことにはならない。加えて中国語は発音が極めて難しい言語である。中国語は入門期に大きな壁にぶつかる言語であり、この壁を少しでも早く乗り越える教育指導が教師の課題でもある¹⁾。

発音教育・学習の練習方法と効果を明確に認識するために、従来「発音」でくくっていた音声教育・学習を、「発音」と「音読」に分けることにする。

「発音」は、音節単位、単語単位、文単位の音声教育・学習を指し、「音読」は、文章による音声教育・学習を指す。

ピンイン

ピンインの習得：ピンインの習得には二面ある。一つはピンインを見て正しい発音ができることであり、一つは二音節語の発音を聴いて正しいピンインを書くことができることである。

ピンインからの脱却：ピンインからの脱却とは、ピンインを付していない漢字だけの文章を見て、正しい発音で音読できることである。

ここで中国語教育に携わった経験のない人のために一言多弁、駄弁を要することを容赦願いたい。中国語学習のポイントの一つとして、発音を聴いてピンインが書けるようになることがある。早めにこの能力を身に付ければ、後の上達も早い。できれば1年生の前期に、遅くとも1年内に習得させたい項目である。しかし非専門課程の学生には時間的な制約もあって、例外ともいえる極めて少数の学生を除いて、それはほとんど無理である。無理ではあるが目標を与え、それに向かって教育することは必要である。だから年度計画には上げた方がよい。しかし目標は達成できない、という如何ともし難い現実が厳としてある。中国語教育にはこのような毎年繰り返される必要かつ解決不可能な矛盾がある。無理な目標は掲げるべきではないとの考えもあるが、この目標だけは教育上下ろすことはできないのである。教育成果とは何か。将来へと発展する正しい評価をするには、教育現場の実際を理解しなければならないことが解るであろう。実践力という技術面の成果が求められるようになった外国語教育は、このように一定の実力はついていても、それを可視化するには困難なものが少なくない。これを無理に可視化しようとすれば、却って実力の伴わない「成果」を出すことになる。成果とは何か。プログラムの特質と教育現場の実態を踏まえて、十分に議論を重ねながらその指標を探るべきであろう。こういう処にこそ説明責任を果たす意味があるのである。

発音

学習目標：イ) 発音をする面：明確な母音の発音、明確な介音、無気音と有気音の区別、nとngの区別、はっきりした声調で音節、多音節語お

よび文を読むことができる。声調には、高さ、重読、軽声を含む。

ロ）発音を聴く面：二音節単語の発音を聴いて正しいピンインを書くことができる。

音読力

学習目標：漢字だけの長文を正しい発音でスラスラ音読できるようにする。正しい発音とは、母音や有気音がはっきりと聴き取れる。声調が正しい。文末の語が軽声は別としてはっきりと声調が聴き取れる。特に第二声がかちんと出ている（日本人は文末を弱く読むクセがあるので、聴き取れないことが多い）。そり舌音が曖昧でない、等である。

漢字だけの課題文を与えて、一定の時間を設定し、その時間内に音読できるようにする。これは中国語の文章を見ただけで反射的に口から中国語が出て来る神経を養うのに最も効果的な練習方法である。学生たちがこの方法を日常の練習に取り入れれば確実に会話力を身に付けることができる。因みに時間設定がどの程度のものであるか説明をすると、学生が中国語の文章を目にした時にその発音を頭で考える前に口の方が先に反応をして声が出て、傍で他の学生がその文章を見ている目でも追うことができないくらいに速く読むことが完成された姿である。インテンシブクラスではすでに2年生の前期段階で実績はある²⁾。（但し、先天的に所謂口下手の学生がいる。これは別途考慮すべきである）

作文力

作文は、日本語を中国語に訳す従来の方法では、日本語的な表現を身に付けてしまう。一度そのような感覚を身に付けてしまうと、そこから脱却するにはかなりのエネルギーを消耗する。却って無駄な時間を費やすことになる。それで無理のない形で徐々にレベルアップを図る方法として、先ずモデル文とモデル文章による模写練習から始めた方がよい。1年生の前期に文法面の効果を狙った文法用例を用いた反訳練習に徹し、後期に日常生活を話題にした長文を用いた反訳練習を行い、2年生からはある話題を題材とした文章を用いて黙写で文の流れや表現法を学ぶ。2年生からは黙

写と並行して、１年生後期の作文を参照しての日常生活の自由作文で慣らし、３年生ではいよいよある話題の下での自由作文である。自由作文は一千字の文章を目標とする。これで高度な作文力の基礎は可能である。大事なことは、反訳と黙写は暗唱しないこと、自由作文の添削文章は暗唱することである。反訳と黙写は、中国語の表現法を考えながら生産する思考作業なので、暗誦方法では応用力が付かないし、自由作文は、自分が生産した中国文が基礎にあるので、暗唱することによって応用力が付くからである。これが作文力の基礎を確実に身に付ける方法である。

作文力の養成には、作文練習だけでなく、講読などの授業で使用頻度の高い連語「詞語搭配」を大量に提供することも効果大である。「詞語搭配」の連語は、幅の広い高度な会話力の養成にも極めて効果のある教材である。

聴く力

聴く力の養成は、実施方針で述べたように、耳慣らしの面と「ひらめき」感覚を磨く面とある。これは並行しながら進めるとよい。そこで聴解の授業とそれ以外の授業に分けて述べることにする。

最初に確認しておかなければならないことがある。それは、授業時間が少なく言語環境のない日本における聴き取り養成の授業は、基本的には“听写”が適していることである。中国の大学で留学生用に開設されている“听力”方法は耳慣らしの面は優れていても、レベルアップの面（より高度な中国語の教材文を用いての聴く力の養成）では効率的に“听写”に及ばない。また耳慣らしの面は“听写”で基本的には十分である。“听力”方式は、使用する教材文章をかなり易くしなければならぬ上に、「ひらめき」感覚を養う面においては“听写”にかなり及ばない。それに最大の欠点は「なんとなく解る」という段階に止まってしまうことである。“听写”方式の授業は日本人教師にも担当できるというメリットもある。

中国語は１、２名の例外を除いてほとんどが初修の外国語である。実際プログラムでも初心者を中心にカリキュラムを組み授業を進めてい

る。そこで先ず、最初期においては教科書の本文や文法用例を用いて耳慣らしの聴き取りテスト(听写)をする。しかしこれは文字通り耳慣らしに終わる。随ってなるべく早い時期に、単語を入れ替えた文で“听写”をし、次に文そのものを組み立て直した応用文で“听写”する必要がある。これが「ひらめき」感覚を付ける方向へと発展する方法である。そして未習の2、3の単語を用いた文を取り入れるとよい。中国語は漢字で二文字語が多い上に日本語と共通した単語も少なくない。“文学”という単語が未習であっても、“日文”、“中文”や“学生”“学校”を知っていれば中国語による説明や文脈から解ることがある。これが「ひらめき」感覚を磨く方法の一つである。教科書通りの教材文を用いての“听写”は、たとえどのように大量の文や文章で満点であったとしても、応用力は全くと言っていいほどついていないのである。だからこのような“听写”を初級の1年次にしっかりとしておくのである。そして1年次の後期において文章による講読の授業をすれば(次項参照)、2年次の聴解で用いる教材用文章は、単なる日常の生活を背景とした文章(検定3級ヒアリング用文章)ではなく、中国の事情や風俗習慣、歴史などを題材とした内容の文章(検定2級ヒアリング用文章)を用いることができる。もちろん作文や会話の実践力の養成に相応しい文体の文章である。そして文章全部を聴き取るのではなく、穴埋め方式にして聴き取らせ、聴き取れなかった語句を中国語で説明をして書かせるようにすれば、大量の中国語で耳慣らしができる上に、幅広く「ひらめき」感覚を養うことができる。特に中国語による説明は「ひらめき」感覚と語感を養うのに大きな効果がある。加えて、多読に準じた読解力の養成もできる。高度な実践運用能力を身に付けるのに非常に効果的な方法である。

1年次の各科目における教材文(本文と文法用例)から応用文へ、単文、複文から会話文、文章へと段階をふんだ“听写”と、2年次、3年次における文体、内容、穴埋め方式、難解語句の中国語による説明方式の聴解専用の授業。この二種の組み合わせ方式が、教育方針を活かした確実に聴く

力を養成する本プログラムの特色ある方法である。

以上、それぞれの技能における教育方針は、今までの説明で明らかのように、いずれも基礎力の養成を基盤として、そこから応用力へと発展する方向性を伴った教育方法を導き出すものである。

８．カリキュラム

カリキュラムは、プログラムの目標を達成する上で極めて重要である。習得すべき中国語のレベルと能力を設定し、確実な基礎力と段階を追った骨格造りを軸とし、各技能習得に向けて相乗効果が望まれるようにするのが一つと、その効果を確実にするために、早期にピンインを習得してピンインからの脱却が図れるようにするのが一つである。

下記のカリキュラムは、上述のプログラムの教育方針に沿って、かつ過去数年にわたるインテンシブ教育の経験を生かして、より効果の上がるカリキュラムを考えたものである。このようなカリキュラムを組み立てた意味と、各科目設置の意味を理解するために解説を加えることにする。

1年	前期	後期
	基礎（文法）	講読・文法
	基礎（作文）	講読・作文
	基礎（発音、聴取）	講読・聴取
	基礎（発音、会話）	会話・聴取

*（ ）内は定期試験の内容を表す。授業の内容ではない。

【解説】

前期

現在の学生の実態をみると、初歩の段階で文法などある技能に特出した授業は効果が上がらない。先ず中国語そのものを与え、中国語に慣れ、力

が付くに従って文法などを漸次詳しく教えていくのが実際に適っている。それで前期は総合的な授業をするのがよい。使用する教科書は1種1冊である。総合的な内容が揃っていて、ある程度の分量のある教科書である。初期の段階で2種、3種使用すると、レベルアップを図ることはできない。そして定期試験では文法、作文、聴き取り、会話と、技能別に焦点を絞って実施する。その方が学生は平常および試験期ともに学習しやすいからである。

また発音に関しては、中間試験を実施する。早期に音節単位の発音（声調を含む）とピンインを習得させるのが目的である。中国語を確実に上達させるには、早い時期で発音を習得するのと否とでは、効果が大きく違ってくるので、初期のある段階で発音練習に専念する時期を設ける必要があるからである。

後期

前期を上述の形で実施すると、後期には次の2点において充実を図ることができる。

1. 4科目中3科目を講読用の文章での授業が可能となるので大幅なレベルアップが可能となる。随って中級の講読、聴解の授業における理解度、消化率が向上し、進度にも好影響が出る。習得する中国語も、語彙数、表現法、文法項目などが適度に増え、作文力の基礎となる。また読解力が高まり、語彙数などが増えれば、中級での会話の授業のレベルアップを図ることができる。
2. 会話専用の授業科目を設置できる。初級で会話科目を置くと日常の会話表現を学ぶことができるので、身近なところから実践力が習得できる。会話の授業は、たとえ初級であっても、インテンシブ教育のような幅広い語学力養成の背景があってこそ生きるもので、週1、2回の授業で会話の授業を実施しても、体系的な基礎作りにはならないので、語学力の養成にはあまり効果がない。

[講読・文法]: 同じ文法事項を説明するのでも、教科書の本文が会話

文の場合は提示する例文が簡単で断片的になり、説明も制約を受ける。本文が文章の場合は、文法用例に幅ができ、文法説明に広がりが出てくるので、系統的、体系的な教育・学習に適している。その分語学力は向上する。自習用の反訳練習と語順並べ替えの練習問題集を作成し活用すれば、文法項目の習得率も高くなり、作文力の基礎力にもなる。教材用の文章の難易度は、検定試験の４級レベルの長文が適当であろう。音読にも比重をかける。

[講読・作文]: 日常生活を題材とした文章を読み、読解力を養成すると同時に、その文章を用いた反訳練習による作文力の基礎を養う。反訳練習は暗唱よりも早く確実に覚えることができる上に、応用力も付くので、暗唱をするよりも効果は高い。また高いレベルでの自学自習できるのが最大の強みである。教材用の文章は、内容的にもレベル的にも、検定４級のヒアリング用の長文の文章が適当である。すでに実績はある。

[講読・聴取]: 本文と共通した内容の文章を用いて“ 听写 ” をする。内容が共通しているので、耳慣らしと「ひらめき」感覚を養う両面の効果がある。聴く力という実践力が付いていることが自覚できるので、この授業が成功すると学生たちの学習意欲が膨らみ、読解、作文の学習にも波及効果が出てくる。学生の学習意欲を高めるという点で最も重要な授業と言える。聴き取った後の音読も重視する。

[会話・聴取]: 常用表現を主として、類似表現を提示し、ニュアンスの違いなどまで説明すれば、会話学習に対する意識も、単なるモノマネ練習から知的理解という方向に変わって、中国語学習全般に対する学習意識や取組姿勢などに期待が持てると思われる。外国語教育は、たとえ会話の授業であっても、実践的練習の中に少し知的要素を取り入れることによって学習意識を芽生えさせる要素があるのが望まれる。その場限りの暗誦や寸劇練習に終わる（英語教育界でよく耳にするのが、「楽しかったけど何も残らなかった。」という学生の声である）のではなく、発展性を持たせるために知的に広がりのある方向を出すことが習得効果を高めることにな

る。

2年 前期	後期
精読・文法・音読	精読・文法・音読
多読・黙写	多読・黙写
作文(暗唱)	聴取・シャドウイング
会話・聴取	会話・聴取

【解説】

外国語教育の中心は中級である。初級で基本的な基礎造りをしたのを受けて、中級では実践力と隣り合わせの高度で幅の広いがっしりした基礎造りが主眼となる。上達のカギは、文構造が正しく理解できる能力と、単語の基本義および他の単語との結び付きによる意味の広がりを感じ得る語感の養成と、それが聴き取る力と話す力に反映できるようにすることにある。それだけに中級の教科書はプログラムの趣旨と目標に合せた自前の教材を開発作成すべきであろう。中級ではこの教材の作成が最も重要な課題である。

[精読・文法・音読]: 検定2級レベルの文章を用いる。文構造を正しく理解できる能力を養うと同時に、重要語彙(常用語)を通して単語の基本義や意味範疇および形態素との結び付きを学ぶことにより、中国語の特性に触れ、実践力に応用できる語感を養う。

常用連語を分類別(意味別、機能別)に一定量提供すれば、「習って慣れる」方式で応用力に発展させる方向が出る。

文章の意味内容を理解し、文構造を把握した上で、音読練習により「熟知」レベルに到達させる。焦点の合ったネガ造りの中心となる授業であるから、本文は分量を少なくして、熟知するまで読み込むことを主眼とする。

[多読・黙写]: やさしい文章をたくさん読んで中国語に慣れることを主眼とする。レベルは検定3級くらいの文章である。作文や会話に応用できる文章であるので、黙写により中国語の感覚を身に付け、それを応用生

産できる基礎造りを目指す。

[作文（暗唱）]: 中国語らしい表現と文の流れで作文できる力を身に付ける最もよい方法は、自分が書きたいことを中国語で書いて、それを自然な中国語になるように添削してもらい、その仕上がった文章を立て板に水を流すくらいに暗唱することである。重要な点は

1. 自分が言いたいことを自分で中国語で書く
2. その中国語を自然な中国語に修正してもらう
3. その文章をスラスラ暗唱する

この3点である。これはたとえ添削により自分の書いた中国語の文章がなくなっても、元の中国語の文章は自分が書いた文章であるし、内容は自分が言いたいことである。この要素がある限り、表現感覚を身に付ける面で名文を暗唱するよりも効果は絶大である。これが真の作文力養成の教育指導である。

作文の内容は、学習生活、クラブ活動、アルバイト、友人関係、土日の過ごし方など、日常の学生生活や大学紹介、故郷紹介などの身近な内容で、作文力のみならず、日頃に中国語を生産する意識や感覚を身に付けることもねらいとする。文字数は1年次後期よりも少し長めとする。このような形での長文作文の練習を、上級と併せて2回経験するとよい。

[会話・聴取]: 中級の会話では、初級のような具体的な場面を背景とする日常生活は題材としない。ある話題の下に、自分の知識や考えを基に会話をするものを教材とする。会話の授業の目的は、高度なコミュニケーションができる基礎力を造ることにある。だから教材文がスラスラ音読できる。同類の内容の会話文が聴いて解る。同様に“听写”できるようになればよい。授業中には会話ができるようにするまでは求めない。なぜなら、授業中に会話ができるようにするには相当の時間を費やして練習をしなければならぬので、インプットする中国語は極端に少なくなり、焦点の合ったネガ造りにはなっても、基礎力の養成には至らないので、応用力へとは発展しがたいからである。会話は、中国人の友人ができるとか、現地で

生活をするようになってできるようになればよい。それが可能となる基礎造りが学校教育である。

3年 前期	後期
精読・文学(音読)	精読・文学(音読)
多読・時事(黙写)	多読・時事(黙写)
聴取・音読	作文(暗唱)

【解説】

3年生の上級は2点特色がある。教材に文学作品と時事文を取り入れることである。

[精読・文学(音読)]: 感覚的な語感ではなく、語義と用法という語学力の核となる学問的に語感を養うには、教材は文学作品に如くはない。しかしインテンシブ教育は実践運用能力の養成がその目的であるので、その目的に沿った作文力や会話力に活用できる教材を使用しなければならない。それが中級である(ちなみに、専門課程では1年生の後期から、他大学のインテンシブ教育では2年生から文学作品を教材としている)。それで本学経済学部のインテンシブプログラムでは、上級クラスで仕上げとして文学作品を使用するのである。インテンシブクラス開設当初は、文学作品は1セメスターを考えていたのであるが、実際に実施してみると半年では不十分で、1年間は必要であることが解った。その分、初級、中級でカリキュラムと授業内容を効果的に充実させたのが、この「8」で述べているカリキュラムとその内容である。

[多読・時事(黙写)]: 教材とする時事文は新聞記事を旨とする。新聞記事は、日々の出来事が紹介されているので、「生の形」で中国の事情を知ることができるだけでなく、そこに用いられている語彙、語句などはある話題の下での常用語句、常用表現の宝庫である。中国語による高度なコミュニケーション能力を身に付けるのにこれ以上の教材はない。新聞記事であるから、文体的にも私たち外国人が中国語の作文力を養うのに益する

ところ大である。時事文と黙写を結び付ける所以である。

[作文（暗唱）]: 作文力養成の仕上げとして自由作文を実施する。テーマは自分で設定する。文字数は約一千字である。このくらいまとまった分量と内容であれば、作文力の基礎は十分養うことができる。方法は中級に同じである。

4年	前期	後期
	講読・音読	講読・音読
	講読・聴取	講読・聴取
	作文（暗唱）	作文（暗唱）

【解説】

実践力は少し油断をするとすぐに低下する。たとえば語学留学である。語学留学は2年間が標準である。1年の留学で帰国をした場合、1年後に卒業をする（中国語インテンシブプログラムでは、語学留学の効果を最大限生かすために、3年間学習をしてから留学することを奨励している）時には相当程度の実践力の低下がみられるのが普通である。それであるから卒業後に中国語を用いて仕事をする人材を育成するプログラム教育としては、4年生に科目を開設するのは、留学をする、しないに拘らず意義がある。

4年生の上級は2科目2単位の選択である。それで語学力の最も確実な基盤となり実践力の素地となる読解力、それと実践力の基盤となる作文力のさらなる向上を目指して、最終段階の科目として設置する。この科目は、就職活動時期が重なり出席と定期的な学習の難しい4年生の実態をも考慮することになる。学生は、どちらかひとつを選択してもよいし、前期、後期と分けて両科目を履修してもよいし、あるいは余剰単位を含める形で1年を通して両科目を履修してもよい。

各科目の趣旨や内容がこれだけ明確になると、評価の仕方も将来の教育

効果へと発展させることができる方法で設定することができる。プログラムポリシー構築の意義は大きい。

8・1．学習学習会（中国語新入生セミナー）の効用

現在の学生は、語学力が身に付くような方法での学習を経験したことがないので、学習方法を知らない。だから中国語を学習するという意識も授業終了とともに消失する。それに伴って自学自習の観念が希薄である。すべての原因はそこにある。そこで一定の力が付いた初級終了の段階で一度一日中中国語の学習をする経験を持ち、学習方法を知り学習意識を涵養することが、今後の稔りある学習への鍵となる。レベルは検定試験三級のヒアリングと筆記を、受験対策用としてではなく、読解力（想像力、類推力、想像力等を活用しての内容と語学的な理解力）と聴く力が付くような方法で実施することが求められる。7日から10日間もすればいいだろう。さらに理想的なのは、夏休みから冬休みの間にかけても2、3日間同様な学習会を実施することである。断片的な知識の詰め込みと、受験対策用の技術的勉強を強制された経験が大きな比重を占める現在の学生には、学習方法について口頭や文書による説明だけでは十分な効果が望めないのです、このような学習学習会（どのように学習をすれば真に語学力が付くのかを体験学習をする学習会）を実施せざるを得ない状況にある。つまり新入生セミナーの外国語版である。

学習意識を持ち、正しい学習方法に則って予習、復習をし、教科書に沿って作成されている補助教材をこなしていけば、1年を終了した段階でクラスの半数以上が検定3級に合格すると思われる。もちろん受験対策用の技術的な勉強ではなく、真正面から中国語学習に取り組み、真に語学力を身に付けての合格である。特に国際社会という異文化交流の舞台上で活躍できる人材を育成するプログラムであれば、なおさら正当な教育指導が求められるであろう。中国語インテンシブプログラムの教育方針とカリキュラ

ムの趣旨はそこにある。検定試験は、学生たちに身近な目標を与えることになり、どの程度「語学力」が付いたのか自分で確認できるので自信につながる。そして本当に語学力を付けるにはどのような学習をしたらよいかを理解するきっかけとなる。そういう意味で検定は通過目標として早い段階で期間を限定して活用をするといいたいだろう。そして出題の形式と内容に大きな制約を伴わざるを得ないために実力、学力の図り難い検定は早めに卒業をして、難しいところを理解し克服する経験と、実践力の向上を実感しながら中国語の学習を楽しみ励んでもらいたいものと思う。筆者は、現行のカリキュラムの下で、授業改善に試行錯誤を重ね、昨年より春季特別集中講座の内容をプログラム本来の到達目標から通過目標に切り替えることによって、些かなりともその感触を得るに至っている³⁾。

（注）

- 1) この点に関してはかなりの経験を積んでおり、学生たちの間ではすでに「ピンインがないのが当たり前」という意識が定着している。筆者が着任した昭和52年当初は第二外国語のみのクラスであったが、中級からはピンインの付してない教材を使用していた。しかし初級の教科書をやさしくせざるを得ない状況になってから中級もピンイン付の教科書を使用することになった。そこで、分量が多くてさまざまな工夫を施したピンインの付してない初級用の教科書を作成することによって、中級からもそれに倣った教材を作成し、音読重視の授業を工夫し、インテンシブクラスのみならず、一般クラスにおいても大きな成功を収めている。一般クラスの学生たちからも、ピンインの付してない方がよい、との意見が寄せられている。
- 2) 平成22年度の2年生は約750字の文章を全員が1分55秒以内で音読できた。23年度前期は1名が315字の文章を37秒で読み、本人は自分が意識をせずに口が勝手に動いて中国語が口からひとりでも出る経験をしている。
- 3) 現状の中で学生の学習意欲を引き出すのはかなり難しい。唯一考えられるのは、数年前から実施している春季特別集中講座の活用である。従来午前中1週間で実施していたのであるが、学生の様子を窺うに、一度早い時期に一日中中国語漬けにして、中国語学習について日頃から意識に上らせることが必要であることが解

った。それで昨年度から、9時半から18時までを1週間実施した。これは思った通り効果があった。「自分たちは勉強の仕方を知りませんでした。」と言って中国語学習にたいする取り組み姿勢が少し出てきたのである。検定も初めて1年生が2名3級を受験し、1名がヒアリングを、他の1名が筆記を合格。2名ともあと半歩であった。今年度は講座に1年生13名が参加。昨年の6名を大幅に上回り、検定3級を受験者も12名と急増し、3名の合格者があった。さらに筆記の合格者が2名、明らかに中国語学習に対する意識に変化が見られるのである。

平成21年度の法人評価委員会の評価結果において、インテンシブプログラムに関して、「大学全体として学生の意欲向上に取り組み、学生の能力を向上させるための取組を行っていくことを求める。」との要望が出され、筆者はそれについて太田学長に問い合わせをした。学長は「学生の状況は担当者がいちばんよく解っているので、担当者でやるべきだ。」と一教員としての担当者に一任された。これは学長への回答でもある。他にもこの小論で紹介しているように授業の内容や方法を工夫したことによる学生の意識と実力の向上がある。その他『2012年度中国語インテンシブプログラム海外語学研修感想文集』には学生の直接の声が多数紹介されている。また学生たちの学習意欲を引き出すための個別指導は、勤務時間外も含めてかなりの時間を要する努力が必要である上に、効果と言えば微々たるものであるが、これについても「引き続きやってくれ。」とのことであった。大学の現状からすると、一担当教員としてはこのくらいが限界であろう。およそ動機付けそのものが期待できない状況の下で、学生たちに学習意欲を引出し向上させるということは、相当な期間を要し、さらに年度を超えた積み重ねが必要である。上述の講座以外においても、少しづつではあるが、その効果は出ていることを報告しておきたい。